

E. Conze :

The Large Sūtra on Perfect Wisdom  
— with the divisions of the Abhisama-  
yānikāra —

Translated from the Sanskrit and edited.

田 端 哲 哉

一

大乘聖典といへば般若経と呼応する如く、般若経に教示された空の思想は大乘佛教の根本精神である。又、今日、大乘佛教が印度思想史上でその根源を何に求められ得るかという時、少なくとも、文献学的には般若経に大乘佛教の先駆性を見出すというのが斯学における定説である。勿論、般若経を編纂した最初期の大乘佛教徒の間では、根本聖典が「阿含経」であったことも否めない事実であろう。しかし阿含経をそのままの姿勢で保持伝承することを願わず、他方アビダルマ佛教の如き煩瑣哲学にもその立場を求めなかつた大乘佛教徒は、自らの求道精神を大乘経典として著述したのであった。而して般若経と呼ばれる経典は、周知の如く決して単一のものでなく、現存する漢訳の般若経（大正大藏経第八卷）ですら四二種を数え、殆んど残存しているサンسكريット本、チベット訳などの点から見

ても正しく般若経群と呼ぶに相応しい膨大なものである。そしてこれら多数の般若経は、永い期間内外の諸研究者によって総合且分類の仕方でも研究され、いくつかに系統立てられた。諸学者は総ての般若経を全体的に眺め、その後或は四種、或は五種、或は一二種等の群に大別している。この点に關する我が國の最近の業績としては、三枝充惠博士『般若経の真理』（春秋社、一九七一、五五—八六頁）が挙げられよう。一方、眼を海外に向ければ、我が國の諸学者と少しく趣を異にした分類方法を、般若経の研究者 E・コーンズ博士は著書 *The Prañāpāramitā Literature*. Mount & Co. 1960. の中で採用しておられる。博士は、50-200 A. D. に南印度で形成された大般若経 (*The Large Sūtra on Perfect Wisdom*) と、一一群を設置し、そこへ (一) 十萬頌般若、(二) 二萬五千頌般若、(三) 一萬八千頌般若、(四) 一萬頌般若、(五) 八千頌般若、以上五種の般若経を充當せしめているのである。これらの諸経典においては、時代的区分の観点より、八千頌般若が他の四種の経典に先行するか否かという古來よりの問題もあって、ハリバドラーやディグナーガは八千頌般若を他の経典の後に纏められたものであると考察している。しかし今世紀に入ってから八千頌般若原型説が有力となり、コーンズ博士も亦この説を提唱しておられる。

博士は總數四五の般若経を、(一) 通常の般若経、(二) 特殊な般若経、(三) 密教的般若経の三種に区分し、更にそれらの内(一)を(A)大般若経、(B)短縮形 (*abreviations*) と細分化するのである。従つて、コーンズ博士が印度のみならず、シナ、チベット、日本、

モンゴル、東南アジアで親しまれてゐる The Large Sūtra on Perfect Wisdom と述べる場合、この様な博士独自の分類法を理解していないと如何なる般若経群を指示しているのか躊躇することとなる。

## 二

さて、ここに書評・紹介を試みる E・コーンズ博士の般若経の翻訳研究書を概観してみよう。当然のこと乍ら、本書は博士自らの分類方法を採用しているのであり、大般若経なる単一経典を取り扱ったものではない。本書は、主として Abhisamayālaṅkāra に添った区分方法を用いての八二章より成る翻訳研究である。三五年間般若経研究に従事しておられる博士の本著書は、

- 一、 Abbreviations.....vii
- 二、 Preface .....ix
- 三、 Chapter Headings of the Perfection of Wisdom in 18,000 Lines.....xiii
- 四、 Divisions of the Abhisamayālaṅkāra .....xvii
- 五、 Introduction to Chapters 1-21 ..... 1
- 六、 Outline of Chapters 1-21 ..... 31
- 七、 Translation of the Sūtra ..... 35
- 八、 Appendix I.....653
- 九、 Appendix II .....657
- 十、 Numerical Lists .....667

## 十一、 Index .....672

以上の内容で構成されている。その中、特に(甲)本書一章―二一章の紹介(一―三〇頁)は博士の研究部分に相当し、重要な示唆を数多く包含している。しかるに一―二一章の構成は少しく複雑を呈しているので次に博士のテクニクを紹介しておく。即ち一―二一章は、(一)一万八千頌般若の章、(二)二万五千頌般若に不可欠の Abhisamayālaṅkāra の部分、(三)博士独自による細分、以上三種の区分によるシステムを用いているのである。詳しくは(丙)(三一―三三頁)に記載されている。

次に、本書の(乙)翻訳部門に就いてであるが、三七―四三〇頁 (abhisamaya I-IV) は、基本的には Abhisamayālaṅkāra に相応している二万五千頌般若の部分である。しかし、一―二一章(三七―二〇二頁)のいくつかの節の中では、十万頌般若や一万八千頌般若、それに漢訳を参照している。二二―五四章(二〇三―四三〇頁)は修正した二万五千頌般若によるもので、本書におけるそれらの部分は、二〇三―二八頁、二四〇―三八頁、三六七―三七〇頁、三九六―四一四頁である。他方、六・七世紀のギルギットや中央アジアのマヌスクリプトに保存された一万八千頌や二万五千頌の叙述に相応するオリジナル部分は、本書にて、二二九―三三九頁、三三九―三六二頁(以上二万五千頌)、三六三―三六七頁、三六九―三九五頁(以上一万八千頌)に翻訳されている。これらに就いて博士は、スタンカタログのイヌスクリプト 0079a (216a-217a, 223a-224a, 226b-228a, 241A-B, 242B-243A, 250b-251a, 256b-257a, 271

a-272a, 294a-297a, 302b-304b, 305b-306a, 347, 357a-361b, 396a-394b, 367a-b, 381a-383a, 406b-407b, 408b-409b) を使  
用している。続いて、本書四三二—六四三頁(Abhisamayā V-  
VIII、本書五五—八二章)は一万八千頌のギルギットマヌス  
クリプトの翻訳で、これは曾って、博士が一九六二年と七四年に  
Serie Orientale Rome に発表された部分である。Abhisama-  
ya VIII 1-3 (五七三頁) と VIII 5, 2, 5-21 (五八二—三頁)  
とは一致せず、従って、博士は二万五千頌を本書の六五三—六  
五六頁に附録として加えられた。翻訳の最後第八章(マイト  
レーヤの章、六四四—六五二頁)はギルギットのマヌスクリプ  
トに見当たらないが、チベット訳二万八千頌(東北カタログ三七  
九〇)には保持されている箇所で、殆んど梵文二万五千頌般若  
(pp. 578a-583b) に相当する部分である。これを博士は曾って  
一九六八年に Mélanges d'Indianisme à la mémoire de L.  
Renou. pp. 233-242 に発表されてゐる。以上の通り繁雑では  
あるが、博士は Abhisamayānikāra を基本的に用いて翻訳  
研究されたのである。

### 三

そこで、次に本書の訳語等に就いて疑義と感ぜられる点を挙  
げることにならう。先ず些細なことであるが明らかに誤訳であ  
らうと思われる点。即ち本書の三七頁にて博士は、'evam mayā  
śrūtam, ekasmin samaye Bhagavā Rājagṛhe——[Pali:  
evam me sutanti, ekam samayan Bhagavā Rājagṛhe——]

を "Thus have I heard at one time. The Lord dwelt at  
Rājagṛha——" と訳されてゐるが、我々は「同じ」二種の問  
題点を見出すのである。先ず、'ekasmin samaye なる一文  
であるが、これは次の Bhagavā Rājagṛhe に係る文頭であ  
つて、決して前の 'evam mayā śrūtam に繋げて読むべきでな  
らうこと。漢訳については周知の通り「如是我聞。一時佛。住王舍  
城。」と、独訳では差して語め Das hab ich gehört. Zu einer Zeit  
weilte der Erhabene bei Rājagṛha——. と、訳される箇  
所である。博士はこの 'ekasmin samaye を 'evam mayā  
śrūtam と関係付けて読んで置かれるのであるが、at one time  
は次の the Lord... の文に繋げなければならぬ。つまり、Thus  
have I heard. At one time the Lord dwelt at Rājagṛha  
——. である。漢訳においても經典の冒頭を「如是我聞一時。  
佛住王舍城。」と読むことは不可能である。次に、'ekasmin  
samaye (on a certain occasion, zu einer Zeit) は或る機会  
(Gelegenheit) を示すので、'ekasmin kāle (at one time,  
once upon a time) と決して云われぬことに注意しなければ  
ならぬ。samaya と kāla の時間論的相違問題に係ること  
である。

次は、博士が一〇頁で na mayate を理解する点への疑問であ  
る。博士は本書に 'man-yāte を man-as (mind) と māna  
(conceit) の二つの意味で関係付けて置かれる。'man-as に対  
して、'to think of or about, to consider 等の訳語を与へ、  
'ya- 'māna には to fancy oneself for, to be conceited

about と解しておられる。この理解に対する我々の疑問は、両者とも原初的には同一の意味でなからうかとどうことである。O. Böhtlingk は man と māna に関してそのことを暗示してゐる(『Skt Wörterbuch in Kurzer Fassung, Graz, 1959. v. Bd. pp. 20<sup>a</sup>-21<sup>b</sup>, 67<sup>a</sup>』)。考へる(mind)にや māna の在り方の一者に外ならない。この点を佐々木現順博士は曾て *asmiṃāna* (我慢)の問題として論究されており、我々も佐々木博士の論証(阿毘達磨思想研究、一九五八年、第三篇第四章『我の概念の佛教思想化—*asmiṃāna*—』五二九—五四九頁)に賛同した。

コーンズ博士は同じく(6)の中(七頁)で、*ksānti* に就いて論及されているが、同頁脚註二四によれば、*ksānti* に関する問題は未解決であり、近時解明されるであろうと期待されている。しかるにこの点も亦我々は佐々木現順博士の論証(前掲著書五八〇—五九三頁)で既に解明されたと考へるものである。コーンズ博士は、四善根の一者 *ksānti* に対して *patience* (七頁)、*uncowardness* (三九四頁)、*steadfastness* (六六七頁)と二様の訳語を与えている。つまり、博士が *patience* と做した時は、*ksānti* を語根 *√ksam* (be able to, to bear) に由来する語と解してゐることになり、他方、*uncowardness, steadfastness* と理解したことは、語根 *√kam* (to will, to desire) と做したことになるのである。ヨーロッパの学者は、殆んど *ksānti* を「忍ぶ」意味のみに把えており、(O. Böhtlingk: *Skt Wörterbuch II. Bd. p. 123<sup>b</sup>*; M. Mayrhofer: *Kurzgef-*

*abes etymologisches Wörterbuch des Altindischen, Heidelberg, 1956 p. 286*; Edgerton: *BHS die. p. 199b*、『*田ノイノホーノ*』は語根 *ksam* を不明と云つてゐる)、『*anutpattika dharma ksānti* (無生法忍) の *ksānti* は *patience* と解してゐる(Kern: *Saddharmapundarīka. Engl. transl. XXI. p. 134*; M. Müller: *Sukhavativyūha. Engl. transl. XLIX. pp. 39-41, 51*)。これらの見解に対して佐々木博士は立場を違へ、次の様に結論される。即ち、*ksānti* は本来巴利語 *√kam* (to will) から由来した *khanti* の梵語化であり、正しくは *khanti* となるべき所 *ksānti* とおれつゝ置いた。而して、*√ksam* (to bear) が *ksānti* に二義的に附され、その結果 *ksānti* に二伝統的な意味 *willing to* と梵語化以後の新しい意味 *to bear* が含まれているという実証である。この見解により、我々は無生法忍の忍が忍耐と何ら関係せず、思想的言語的に *willing to* と理解するべきことを正当とした。チャット訳は *bjod pa* (to bear) で、これは梵語化以後の意味のみを訳出した為である。コーンズ博士はそれ故、六波羅蜜の *ksānti* をチャット訳によつて *the patient acceptance* (三七頁脚註1)と訳されつゝるが、我々はその訳語の中に *the willingly acceptance* の意味も含まれていることを察知しなければならぬ。いずれにしても博士には煖頂忍世第一法の忍を *patience* か *steadfastness* に決定しなければならぬ課題が残されていよう。そしてこのことは博士が本書を著述するに當つて用いられた参考文献がいかに古く研究書であつたろうとどう点も推測されるのである。

皮肉にも佐々木博士の前掲著書にコーンズ博士は序を呈されているのである。又、本書一五、一一八頁にて pada artha meaning of a word と解すべきか that which corresponds to the meaning of a word とすべきか論ずるに當りて用いられた参考文献 Udanavarga に就いては、一九六五年以来斯等では F. Bernhard: Udanavarga. Bd. I が公認されているのであるから当然 Rockhill 本よりも Bernhard 本を用うべきであらう。因り Dhp. 92 = Udv. (Bernhard ed.) XXXIX 25-28; Dhp. 93 = Udv. (ibid.) XXXIX 29-32 とある。復た、博士は tathatva が不明瞭である旨を述べておられる(五二頁)が、我が国の学者によって除々にではあるけれども解明されているので附言しておきた。

所で本書の翻訳部門にて what is the emptiness without beginning or end? と訳出(一四五頁)なれる箇所 (Abhisamayānīkāra I 9, 12)がある。without beginning or end が梵語 anavartāgra (無始無終)の訳であることは同頁の脚註十に提示されている通りである。しかし、これは or なる接続詞とでも and 即ち without beginning and end の方がより妥当であるからか (Edgerton: BHS die, p. 21b)。加えて梵語 anavartāgra に相当する巴利語を同じく脚註十で anant-amagga と充つておられるが、これも首肯し難く anantagga (anu-antata-agga) 「佐々木現順編著『煩惱の研究』九四頁参照)とすべきであらう。

Tathagata → Tathāgata, Hobogirin → Hobōgirin, Tohoku →

Tohoku, Dipanīkala → Dipanīkala, cognitions → cognitions など細い誤植も目につくが根本的には何らの影響もない。ただ (→ Abbreviations, p. viii) にて 「T」と省略された Tāshō Issakkyō は、新修大正藏經を指すもので (例えば本書五〇二頁、脚註二三)、これは矢張り Tāshō Daizōkyō とするのが望ましい。

#### 四

而してコーンズ博士は本書において実に多くの示唆に富んだ問題を提起されている。例えば博士は vikalpa (conception) を述べておられる(一九頁)。所謂、大乘佛教では vikalpa (分別)を好ましくない否定的な意味に用いることが多い。しかるに巴利の vikkappa に対するセンスでは大乘佛教特有の意味を有せず、我々は巴利語と梵語の関係を言語哲学上で究明する必要がある。又、博士は梵語 prāpñāpindiko (Pāli. pattapindika) が Abhisamayānīkāra V. I. 8 (一万八千頌般若・ギルギットマヌスクリプト四一四)にて云われるのみで、他の佛教梵語の書物中には見当たらないと言及されている。これら僅かな事例を挙げても判る如く、般若経に巾広いセンスを持たぬ評者にとっては多大の恩恵を蒙る翻訳研究が本書の真髄である。

以上、本書に対する卑見を述べて、今世紀最大の般若経研究者 E・コーンズ博士の新しい業績を称え、併せて紹介の責務としたい。最後に、博士が今後の般若経研究に対する三点の期待と方向を提示されておられるので、それらを簡略に紹介してお

こう。先ず第一に、Large Sutra (大般若経群) の論旨の一般  
的概要を早急に確立しなければならないこと。第二は大智度論  
(Ta chih tu lun) を近い将来西欧語に翻訳完結して多くの般若  
経と比較を試み、アビダルマ哲学的調査研究を大智度論上にて  
施行すること。第三は膨大な般若経群全体の相互関係を明白に  
し、少なくとも Large Sutra 中の相違一致点を明白にするこ  
と。これら三点が今世紀に残された般若経研究の課題である。

本書は内外の般若経研究者のみならず、広く東洋哲学乃至宗  
教に関心を寄せる読者を必ず裨益する労作であると確信して云  
えるのである。これまでに挙げた二・三の疑義によって博士の翻  
訳研究が本質的に少しも損われぬことは当然である。博士の翻  
訳研究は決して読解し易い英語で書かれていると云い難いが、  
我々にとっては英語自体に親しむ好機会であることも異論の余  
地がない。尚、佐々木現順博士は本書の出版後直ちに英文の書  
評 [G. H. Sasaki: Book Review. On behalf of the University  
of British Columbia, Canada. Sep. 25, 1975] を発表われ、  
このを併せて記して置く。

(Berkeley: University of California Press, 1975. Pp  
xviii+679. 160 x 240mm. \$ 25.00)

## 賛助会員募集

次の要項で賛助会員を募集いたします。

○会費 年間千三百円(二冊分)  
○申込み 京都市北区小山上総町

大谷大学佛教学研究室  
佛教学セミナー編集部

\* 郵便振替用紙も御利用下さい。

(京都 25303 大谷大学佛教学  
研究室 代表者 櫻部 建)

既発行の「佛教学セミナー」を  
御希望の方も右記のところへお申  
込み下さい。

第一号 絶版 第六号 絶版

第二号 絶版 第七号 絶版

第三号 絶版 第二十号 絶版

第五号 絶版

第四号、第八号より第二十二号の  
内、二冊以上お申込みの方は送料  
を研究室で負担いたします。第六  
号まで各冊二〇〇円、第七号より  
第十号まで、各冊二五〇円、第十  
一号より第十四号まで各冊三〇〇  
円、第十五号より、第十七号まで  
各冊三五〇円、第十八号、第十九  
号四〇〇円、第二十一号、第二十  
二号六〇〇円)